核廃絶への願い

被爆70年のヒロシマ体験記　下

“あの日の記憶”次代に

「ここで死ぬんだと思った瞬間は、本当に怖かったそうです」。大きな身ぶりを交え、抑揚をつけながら、“あの日の記憶”をゆっくりと話す。

大田孝由さん(68)＝奈良県生駒市。広島原爆の語り部だが、被爆体験はない。当事者の体験を引き継いだ「被爆体験伝承者」だ。

体験をどう継承するかは、広島市が直面する重要課題。原爆投下から70年の今年、被爆者の平均年齢は初めて80歳を超えた。遠くない将来、直接の被爆体験者はいなくなる。

同市は2012年、体験を次世代に伝える伝承者を3年かけて養成する事業を始めた。今年4月、大田さんら第1期生50人が初めて委嘱され、平和記念資料館などで活動を始めた。

□　□

「他人の体験を語るなんて絶対、無理」。伝承者の養成事業を聞いた被爆者の梶本淑子さん(84)＝広島市＝は当初、そう思った。

広島市の平和記念公園で語り合う（左から）中村さん、梶本さん、大田さん

14歳の時、爆心地から2・3キロ離れた軍需工場で被爆。梶本さんを捜すため市内に入り被爆した父は、1年半後に亡くなった。

「そんな私の思いは、私にしか表現できないから」

それでも市に頼まれ、自らの体験を引き継ぐ5人の伝承者候補生を引き受けた。その一人が大田さん。月1回、梶本さんらとの交流会に自費で片道3時間かけて奈良から駆け付け、熱心に質問を繰り返す姿に、少しずつ伝承者への期待が芽生えていった。

梶本さんの次女・中村裕美さん(55)＝広島市＝も当初は伝承事業に懐疑的で、梶本さんに「お母さんの映像を残す方が確かよ」と話していた。ところが昨年、第3期の伝承事業に申し込み、「お母さんの体験を引き継がせて」と切り出してきた。やはり大田さんの熱意に触発されたという。

「被爆者本人になりきるのは無理でも、気持ちに寄り添うことはできる。戦争の記憶が失われつつある今だからこそ、できる限りのことをしたい」と中村さん。傍らで、母がうれしそうにうなずいた。

□　□

大田さんは元小学校教諭、そして被爆2世だ。偶然だが、母親は梶本さんと広島市内の同じ地域の出身。自らも5歳の時に関西へ引っ越すまで、広島で過ごした。

関西で母は、広島出身であることを周囲に隠し、大田さんにも口止めしていた。被爆者への根拠のない偏見を恐れたためだ。被爆体験について多くを語らないまま、03年に亡くなった。

「もっと原爆について聞いておきたかった。私の原動力は後悔です」と大田さん。そして、小さく笑う。「梶本さんに母を重ね、聞けなかったことを聞いていたのかもしれません。梶本さんと実の母。2人分の思いを次代に継いでいきたい」（大橋洋平）

2015年8月11日　山陽新聞朝刊　26ページ
(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。